文芸研ブックレット 27

展開法と層序法と折衷法

秋田大学教育文化学部　阿部昇教室での模擬授業
二〇〇四年六月三〇日
授業者　西郷竹彦

二〇〇四年一一月
文芸研編集

展開法と層序法と折衷法

秋田大学教育文化学部　阿部昇教室での模擬授業
二〇〇四年六月三〇日
授業者　西郷竹彦

阿部昇教授　西郷先生の特別授業を始めます。

昨日特別講義を聞いた方もいますが、今日初めての方もいますので、少しご紹介します。国語教育では知らない人はいない、戦後の国語教育を支え続けて来られた方です。みなさんも、これから、先生の書かれたいろいろな論文に出会うと思いますが、戦後の有名な国語教育論争、たとえば「出口論争」とか「冬景色論争」とかの中心人物でいらっしゃいます。

海外でもたいへん名の知られている方で、三三巻プラス三巻の『西郷竹彦　文芸・教育全集』を出されていて、これは私の研究室にもあります。たいへんゆたかな内容で、戦後の国語教育の中で、教科内容を最も体系的にきちんと作り上げて来られています。

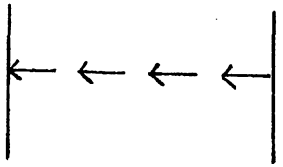
昨日も言ったのですが、本来なら、高い参加費を払ってお呼びしなければならないのですが、その先生が今回、みなさんへのサービスとして模擬授業をして下さることになりました。

三つのタイプの模擬授業ということです。みなさんは生徒役でがんばって、しっかり発言して下さい。

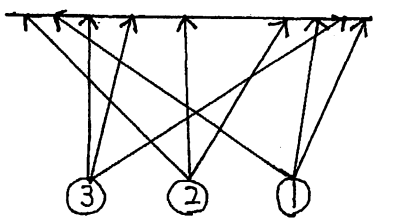
では、西郷先生お願いします。

展開法と層序法

西郷　はい。授業というものをおおまかに分けますと、「展開法」と「層序法」と二つあります。これをとりまぜた「折衷法」と言ってもいいものもありますが、基本は展開法と層序法の二つです。



展開法というのは、たとえばどういうことかといいますと、詩でも物語でも良いんですけれども、書いてある順序に授業をやっていきます。（図を板書）



層序法というのは、作品を、ある観点で見る。
まず、初めに①の観点で見る。（図を板書）
次に②の観点で見る。
その次に③の観点で見る。
というふうに、絶えず全体を見わたして目配りをして、一つの問題、次の問題というふうに考えていく。
こういうふうなやり方を層序法と言っているわけです。（二つの図の板書を消す）

実際にこれからやってみますから、だいたい「あ、こういうことか」とわかると思います。

模擬授業

それで、実際の授業では、教師が読んだり、（〈よみきかせ〉という）、子供に読ませたり、話し合いをさせたり、ノートに感想を書かせたり（ノート指導）それを発表させたり、いろいろなことが入り込んでくるのですが、今日は時間がありませんから、それらのほとんどはカットして、肝心なところだけをやってみたいと思います。

今日は三つの詩を準備しましたけれども、だいたい五、六年生の授業という想定でやってみようと思います。ですから、みなさんも、五、六年生になったつもりで、むじゃきに（笑）発言してください。

「話し合い」と言ったら、二人か三人で話し合いをしてください。

それから、ふつうの授業とちがって、今日はみなさんに講義するかわりに授業をするわけですので、授業の合間合間にコメントをつけて、これはこういうことですよ、とか、なぜこうしたかとか説明します。たいへん変則ですけれども。

「かもつれっしゃ」（層序法）

最初に有馬敲さんの「かもつれっしゃ」です。（模造紙に書いた詩を黒板の右端にはる）

かもつれっしゃ　　有馬　敲

がちゃん　がちゃん　がちゃん
　がちゃん　がちゃん　がちゃん
　　がちゃああん　がちゃああん

がったん　ごっとん　がったん

ごっとん　がったん　ごっとん
がったん　ごっとん　がったん

ごっと　がった　ごっと　がった
ごっと　がった　ごっと　がった
ごっと　がった　ごと　がた

がた　ごと　がた　ごと　がた　ごと
がた　ごと　がた　ごと　がた　ごと
がた　ごと　がた　こと　かた　こと

かた　こと　かた　ことかたこと
かたことかたことかたことかたこと
かたことかたことことことことこと

ふつうは、まず教師が〈よみきかせ〉をして、それから子供たちに何回も読ませますが、それは省きます。

それで、展開法だと、まず一連をやって、次に二連をやって、というふうに次々やっていくわけですが、ここでは層序法でやってみましょう。

層序法にもいろいろありますが、まず、こういうふうにやってみましょう。

読んで「気づくこと」。（板書）何でもいいです。たとえば「一連が三行だなあ」とか「ぜんぶ平仮名だ」とか。目で見てわかることです。解釈なんてしなくていいです。

まず「三行」（板書）だということ、「平仮名」（板書）だということ。

それから何ですか。いろいろ言ってみて下さい。子供なら、すぐ言いますよ。

P　下がっているところがあります。

T（西郷）　はい。そういうのを何といいますか。「肩下がり」（板書）といいます。「一字肩下がり」とか「二字肩下がり」とか。ここでは一字肩下がりになっています。

P　〈がたん　がたん〉とか何回も同じことばが続いています。

T　こういう〈がたん〉とか〈ごとん〉とかいうことばを何というか知っていますか。

P　・・・・

T　私は今、五、六年生でなく大学生に聞いているんですよ。（笑）

P　擬音語。

T　ふつうは擬音語といいますね。これを私は「声喩」（板書）と言っているんです。

音声による喩えです。擬音語といってもいいんですよ。
ぜんぶ声喩になっていますね。
今、四つ出ましたね。他にもたくさんありますよ。
P　同じ音がくり返されている。
T　はい。「同音反復」（板書）ですね。たとえば〈がちゃん　がちゃん　がちゃん〉とか〈がちゃああん　がちゃああん〉とか〈こととことこと〉とか。この同音反復は、読むとリズムになるのです。
P　最初の方は・・・・
T　「最初の方」と言わずに「一連」と言って下さい。
P　一連の方は〈がちゃああん〉と言っていて、だんだん言葉が短くなっています。
T　ふん、ふん。「長いのから、だんだん短く」（板書）なっていく。いいですよ。
これらのことがぜんぶ意味をもってくるのですよ。後でわかりますけどね。
これは、誰もができることでしょう。頭を使わなくていい。（笑）
層序法というのは、もともと地質学の用語です。地層というのがあるでしょう。地層を調べるときは、一番上の表層をはいで、次にその下をはいで、というふうにしてだんだん下へ、奥へ入っていくでしょう。そういうふうなやり方です。
まず、目で見てわかることをとらえる。さらにもう少しつっこんで、さらにまたもう少しつっこんで、最後にテーマとか何とかいうところまでいく。そういう意味で層序法といいます。
層を順序よくとらえていく。「序」は「順序」の「序」です。
ボーッと私の顔を見つめていないで。（笑）何か言って下さい。
P　五連めですが、四連までは、一つの言葉ごとに区切られているのに、五連の一行めの終わりから言葉がつながっている。

わかちがき・つづけがき

T　四連までの、そういうのを何といいますか。
P　・・・・
T　五、六年生ですから、教えていることと教えていないことがありますからね。見た通りでいいんですよ。
こういうのを「わかちがき」（板書）といいます。
そうすると〈かたことかたこと〉のようなのを何といいますか。
P　・・・・
T　こちらは分けていて、こちらは続けているのだから「つづけがき」（板書）。（笑）
前の方は「わかちがき」で後の方は「つづけがき」になる。これにはちゃんと意味があ

るのですよ。

他にはありませんか。

変化をともなって発展する反復

P　一連から四連の三行目の途中までは濁点がついているけど。、その後は濁点がついていない。

T　うん。濁点がついていないのを何といいますか。

P　清音。

T　うん、その通り。（笑）「濁音が清音に」（板書）なるでしょう。これにも意味があるんですよ。

P　一連ごとに同じ言葉でまとまっている。

T　ここは〈がったん　ごっとん〉だけど、ここは〈がった　ごっと〉だということですか。

P　はい。そういう意味と、一連ごとで言葉が変わっているけれども、一連の終わりでは、また少し変わっている。

T　ああ、ちょっと変わってきますね。三連は〈ごっと　がった〉だけど、三行目のここは〈ごと　がた〉になって、次の四連の頭はどうなっている？

P　〈がた　ごと〉になっています。

T　そう、〈ごと　がた〉の〈がた〉を受け継いでいますね。

みなさん、わかりますか。三連の〈ごっと　がった〉が〈ごと　がた〉に変化しているでしょう。そして、この変化を受けて、四連が〈がた　ごと〉と始まっている。

やがて四連は、〈がた　ごと　がた〉が〈かた　こと　かた〉と濁音から清音になって、五連は、それを受けて〈かた　こと　かた〉となって、次に〈ことかたこと〉というつづけがきになっていく。

三連から四連へ、四連から五連へ移る、四連の終りと五連の始まりが連続している、つながっている。

三連から四連へ移るとき、四連から五連へ移るとき、終行と始行が連続しています。「つながり」（板書）があります。

それから、〈ごっと〉の〈っ〉は何といいますか。

P　促音。

T　〈がちゃん〉の〈ゃ〉は何といいますか。

P　拗音。

T　初めの方に拗音があって、促音があって、後の方にはない。こういう変化があります。

変化をともなう反復です。全体に反復があるでしょう。でも、単なる反復ではない。変化があります。これを「変化をともなって発展する反復」（板書）といいます。

授業のときには、子供にわかる言葉で書けばいいわけですよ。

それから、もうないですか。

P　先生が「変化をともなって発展する反復」とおっしゃいましたけれども、一連の三行目の〈がちゃああん　がちゃああん〉は、次へつながっているわけではない気がするんですけれども、なんで、そこだけ伸ばすんでしょうか。

T　ええ。その「なんで」は、これから、この後で考えます。（笑）今は気づくことをあげていきましょう。その問題はちゃんと後で出てくるわけですよ。「なんでだろう」「それは何を意味するか」という問題ですね。

それから、これに気がついた人はいませんか。〈ごっと　がった　ごっと　がった〉あるいは〈がったん　ごっとん　がったん　／ごっとん〉。〈がた　ごと　がた　ごと〉。

まだピンと来ませんか。「がた　がた　がた　がた　がた　がた」じゃないですね。「ごと　ごと　ごと　ごと　ごと　ごと」でもないですね。〈がた　ごと　がた　ごと　がた　ごと　〉でしょう。

それは気づいていましたか。「がた　がた　がた　がた　がた　がた」あるいは「ごと　ごと　ごと　ごと　ごと　ごと」じゃありません。

〈ごっと　がった　ごっと　がった〉〈ごと　がた　ごと　がた　ごと〉です。〈ごっと　がった〉あるいは〈がた　ごと〉（板書）ですね。これも変化をともなう反復ということの中に入ります。

もちろん「句読点がない」ということもあります。これも書いておきましょう。（板書）

他に気づいたらまた後で言って下さい。

さて、こんなふうに、気づいたことがたくさん出てきました。

声喩は何を表現しているか

そこでちょっと考えてみましょう。

この〈ごっと　がった〉とか〈ごと　がた〉の声喩は何を表しているのでしょう。何を表現しているのでしょう。何の音か、と言ってもいいですね。

一連は、ちょっとおいといて、二連・三連・四連・五連の声喩は何の音ですか。

題名は「かもつれっしゃ」となっていますが、「かもつれっしゃの音」なんて言わないで下さいね。（笑）

P　車輪の音。車輪が動く音。

T　車輪だけが動いている？

P　えっ、電車が動く音。（笑）

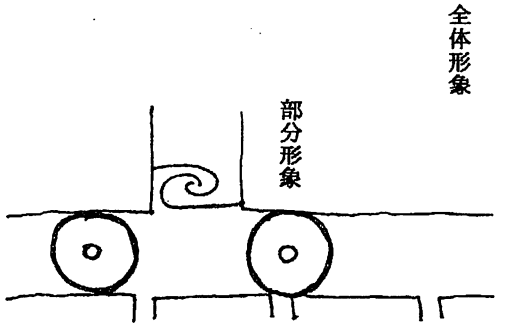
T　電車、車輪が動くだけで〈がったん　ごっとん〉と音がするの？

P　貨物列車とレール。

T　そんな、手真似しなくてもいいですよ。（笑）

電車はレールの上を走っているわけね。

ちょっと図に描くと（板書）レールがあるんですけど、レールは長いですけど、ここに継ぎ目があって、切れているのです、こういうふうに。



これは車輪で、これは車輌です。

それで、文芸学では、車輌と車輪のことを「全体形象」と「部分形象」（板書）と名付けています。

子供たちには、こんなことは教えなくていいんですよ。

「全体形象としての車輌の中の、部分形象としての車輪」といいます。

あるいは「線路という全体形象の中の、継ぎ目という部分形象」といいます。

そうすると、この〈ごっとん〉は、継ぎ目という部分形象と車輪という部分形象の、つまり車輪が継ぎ目に落ち込んだ時に出る音なのです。

継ぎ目がないと、夏、暑くなると、線路が膨張して伸びて、線路がゆがんで脱線しますから、少し空けてあるのです、一センチぐらいかな。ここに車輌が落ち込んだ時に〈がったん　ごっとん〉と音がするわけです。

ですから、「車輪の音」とか「レールの音」とか言ってはいけません。これは、落ち込んだ車輪と、レールの継ぎ目がぶつかって出る音です。それが〈がったん　ごっとん〉です。

ここまでは、わかりましたね。

変化の意味

さて、そこで、二連から見てみますと、初めは〈がったん　ごっとん〉、次に〈ごっとがった〉となって、それから〈がた　ごと〉となって〈かた　こと〉となっています。濁音から清音になりました。

それから、促音があったのに、促音がなくなりました。

この変化は何を表しているのでしょう。

それから、音の数ですが、二連は〈がったん　ごっとん　がったん〉で三つ、三連は、〈ごっと　がった　ごっと　がった〉で四つ、四連は〈がた　ごと　がた　ごと　がた　ごと〉で六つ。だんだんふえていきますね。これは何だと思いますか。

P　スピード。速さが速くなっている。

T　うん。速さが速くなる。スピードが速くなる。そうですね。

スピードが速くなると、一定の時間に継ぎ目にぶつかる音がふえますね。そうでしょう。だから、だんだんだんだん、六連の終行になると〈かたことかたことことことことこと〉と、隙間なく聞こえてくる感じになります。

初めは〈がったん　ごったん　がったん〉と、ゆっくりしています。そして〈ごっと　がった　ごっと　がった〉となって、〈がた　ごと　がた　ごと〉となって、こんどは、〈かたことかたことことことことこと〉というふうにスピードアップしていく。

ですから、このへん（板書の〈声喩〉から〈がった　ごっと　がた　ごと〉まで）はスピードアップしていく。

濁音・清音

さて、なぜ濁音から清音になるのでしょう。

〈がた　ごと〉と〈かた　こと〉は濁音と清音のちがいですが、何のちがいでしょう。ヒント。どちらが強い音ですか。

P　〈がた〉。

T　そうですね。濁音を発音するときに力が入るでしょう。ですから「たちつてと」より「だぢづでど」の方が、「かきくけこ」より「がぎぐげご」の方が力強い。

それから、促音というのは、いっぺんつまるから力が入りますね。〈がった〉と〈がた〉とを比べると〈がった〉の方が強いです。

そうすると、ひじょうに重々しい強い音から、軽々とした音へ変化していっているわけです。濁音から清音へ、促音のある音から、促音のない音へ変わっていく。

なぜ、重たい音から軽い音へ変わるのでしょうか。みなさん、走っていくようすを頭の中に描いて考えて下さい。スピードアップしていくと、どうして重い音から軽い音に変わるのでしょうか。

みなさんは、車で高速道路を飛ばしたことありませんか。一五〇キロぐらいスピードを出すと、車体が浮き上がるでしょう。要するに、スピードを出すと、垂直にかかる荷重より軽くなる。つまり浮き上がるわけです。

浮き上がるから、レールの継ぎ目で〈がったん〉と落ち込まない。〈かたことかたこと〉と軽く行く。

つまり、この変化から、スピードアップして軽々と走って行くようす、イメージがわかります。

それから三連が〈ごっと　がった〉から〈ごと　がた〉と変化して次の四連へつながっていくというのは、連の切れ目はあるのだけれども、走っている車輌がギクシャクしない

で、連続して、なめらかに、こういうふうに（板書）スムーズにスードアップ（板書）していくという感じが、このつながりぐあいから出てきます。
そして最後は〈かたことかたことことことことこと〉とひじょうに軽やかに走って行く。

リズム

ところで、なぜ「ごっとごっと」でなく〈ごっと　がった〉なのでしょう。音が実際にちがうのでしょうか。〈ごっと〉と〈がった〉と一回一回ちがうのでしょうか。客観的には同じじゃないでしょうか。〈ごっと　がった〉というふうになるのでしょうか。
時計の音を、歌では〈チック　タック〉と歌うでしょう。あれは、実際は「チック　タック」とならないですよ。同じ音ですよ。
それから〈かあさん　おかたを　たたきましょう。たん　とん　たん　とん　たん　とん。〉と歌います。「たん　たん　たん　たん」じゃないですね。
それから〈鐘が鳴ります、〉何？

P　〈キン　コン　カン〉。

T　そうですね。どうしてそうなるのでしょう。

単調になるからです。「チック　チック　チック　チック〉では単調です。歌では強弱がだいじです。強弱をつけるわけです。〈チック　タック　チック　タック〉と。そうするとリズミカルになるわけです。
だから〈キン　コン　カン〉としたり〈たん　とん　たん　とん〉としたりして変化をつけるわけです。
詩というのは、やはり歌の要素も入っているわけです。この方が楽しいでしょう。もし「がったん　がったん　がったん　がったん」だったら単調でねむくなってしまうでしょう。「ごっと　ごっと　ごっと　ごっと」より「がった　ごっと　がった　ごっと〉の方が楽しいでしょう。どうですか。
ちょっと読んでみましょう。〈がた　ごと　がた　ごと　がた　ごと〉。どうぞ。

P　〈がた　ごと　がた　ごと　がた　ごと〉。

T　こんどは「がた　がた　がた　がた　がた　がた」で。

P　「がた　がた　がた　がた　がた　がた」。

T　なんか、ムシャクシャする。雑音ですね。わかるでしょう。

音ですからね、実際に発音させてみると、よくわかる。
「がた　がた　がた　がた」は雑音です。〈がた　ごと　がた　ごと〉と言うと楽しい。
だから、歌では〈チック　タック〉となるし〈たん　とん〉となる。
べつに一回一回、力の入れ方がちがうわけじゃないですよ。歌だからです。

歌と絵の要素

詩は、やはり歌の要素も取り入れているし、それから絵の要素も取り入れます。

描く連の字面を見て下さい。同じ形に並んでいますね。同じ形に並んでいるから、同じ形の車輌が並んでいる感じですね。

題材と主題

それでは一連を見てください。〈がちゃん　がちゃん　がちゃん〉というのは何の音でしょうか。私は黒板にあなた方が気付くように、〈全体形象と部分形象のところで〉ヘタな絵を描いていますよ。見てください。ここは何ですか。

P　車輌をつなぐ部分。

T　うん。つなぐ部分のことを何といいますか。連結器ですね。連結器には「あそび」があるんですよ。で、機関車が「ガッ」と引っ張ると、まず一番目の車輌が〈がちゃん〉となる。次に二番目の車輌が引っ張られる。その次に三番目の車輌が引っ張られる。それが〈がちゃん　がちゃん　がちゃん〉という音になって、最後の車輌まで行くと〈がちゃああん〉となって走り出す。

P　ほおおっ。（笑）

T　感動してる。（笑）だいたい、子供はそうですよ。あなた方も子供ですね。（笑）よろしい。楽しいんだよ。

だから、「さあ、行くぞ」と機関車が動き出してから、全体がそろって走り出すまでには「間」がある。

しかも、最初は走りも重たい。〈がつたん　ごっとん〉という感じで重々しい。それが〈がった　ごっと〉となり〈がた　ごと〉となり、しまいには軽快に、楽しげに〈かたことかたことことことことと〉となります。

この詩は、貨物列車のスタートから、出発進行の変化を楽しく描いているわけです。

そうすると、「なんだ、貨物列車のことか」というわけですけれども、題材は貨物列車でも、主題は、実は人間のことなのです。

人間の何が描かれていると思いますか。

みなさんもいろいろなグループを作っているでしょう。グループにはリーダーがいます。リーダーが何かを「やろう」と言うと、すぐにパッと、ササッとやる？

P　・・・（笑）

T　そうはいかんでしょう。あまりすぐにサッとはやらないでしょう。リーダーが「やろう！」と〈がちゃん〉とやっても、〈がちゃん　がちゃん〉という感じで「間」があるでしょう。そして最後にやっとみんなが〈がちゃああん〉とそろって動き出す。それでも最初は動きが重々しい。なかなかスムーズにはいかない。そのうち調子が出て来て、だん

だん〈かたことことことこと〉となって行く。という感じがしませんか。

たとえば、そういう読み方もできます。いろいろな読み方がありますけれども。

そういう詩です。

今、授業の「層序法」というのはどういうものか、ということを一応お見せしたわけです。

まず、目につくところから。いつでも全体を見わたす。全体を見わたして、「ここは濁音があるけれども、ここでは清音になっている」とか「ここは促音があるけど、ここにはない」とか「ここは〈わかちがき〉になっているけれども、ここは〈つづけがき〉になっている」とか、「だんだんスピードアップしている」とか。

そして、それらをもとにして、イメージ化していく。そして最後には、今やったように、人間の問題として意味づけしていく。

というふうに、表層の層からだんだん深い層へと入って行く授業の運びです。ですから、私は、それを「層序法」と名付けています。

条件によって

でも、この詩は「層序法」でなければダメだということではないですよ。

「展開法」でやることもできるわけです。

たとえば一連の〈がちゃん〉は何だろうな?〈かもつれっしゃ〉だから、「さあ、出発!」ということで〈がちゃん〉とやっているところだね。

〈がったん　ごっとん〉は重々しい感じだね。

それが〈ごっと　がった〉となって、〈がた　ごと〉となって、しまいには〈かたことことこと〉となっているね。

というふうにして、一連から二連、三連、というふうに、次々にイメージを作ってふくらませて行くという「展開法」の授業もできるわけです。

どちらでするかは、「その詩がどんな詩か」ということとか、「自分の受け持っている学級がどんな学級か」とか、「これまでどんな授業をしてきたか」、「これからどんな授業をしようか」、とかいういろいろな条件によって、総合判断して、では層序法でやろう、とか、では展開法でやろうとか、決めればいいわけです。

それは教師が決めればいいのです。

すべて方法というのは、どんなばあいでも、理想的な方法というのはないのです。唯一絶対の理想の方法というものはない。それで何でもやればいいという方法はない。

展開法には展開法の良さかかがあり、層序法には層序法の良さがあります。

一長一短あります。長所は、裏返せば短所であり、短所は、裏返せば長所です。それぞれの長所短所をわきまえて、それをうまくあてはめて、生かしていくというのが授業です。

【「かもつれっしゃ」の板書】

詩

展開法
層序法

気づくこと
三行　×句読点
平仮名
肩下がり
声喩
同音反復―リズム
長↓短
濁音↓清音
三↓四　四↓五　つながり
変化をともなって発展する反復
がった　ごっと　がたごと

全体形象
部分形象

スピードアップ
テンポ

「村の人口」（展開法）

時間がないから駆け足でいきます。（模造紙に書いた詩を黒板の右端にはる）

村の人口　　原田直友

村の林にゃ小鳥が八十羽
いやいや　お昼ごろ
ひなが三羽かえったそうだから八十三羽
村の小川と池にゃ魚がちょうど五百匹
村の野原と畑にゃもぐらが六十七匹
それに虫が五万二千とんで一匹
犬が四匹ねこが三匹
ねずみが一軒に二匹として四十匹
村の人は九十六人
あわせて村の人口は
ただ今　五万二千七百九十四

T　この「村の人口」という詩も展開法でもできるし、もちろん層序法でもできるのです。

だんどり

今度は展開法でやってみましょう。

さっきの「かもつれっしゃ」だと、スタートからだんだんスピードアップして最後は、軽やかに走るという、進行して行く姿がありますから、自然にやれば、展開法が自然にのっかっていくという詩だということも言えます。しかし、ひじょうに、表現に特徴があるから、そこから入って行くのが有利だというふうにも考えられる。いろんな考え方ができます。

くり返しますが、絶対の方法というものはなく、ベターな方法がある。ベターというのは、条件を考えて、条件に合わせて決定すればいいことです。

さて、「村の人口」です。

原田直友さんは、山口県の小学校の先生をしておられて、後に東京の方へ出て来られました。初め、大人の詩を書いておられました。自分の学級の子供に詩を読んでやったり、自分で詩を書いたりしているうちに子供のための詩を書くようになった人です。

〈村の林にゃ小鳥が八十羽〉。〈にゃ〉というのは、俗語的な口語りの表現です。

〈いやいや　お昼ごろ／ひなが三羽かえったそうだから八十三羽／村の小川と池にゃ魚がちょうど五百匹／村の野原と畑にゃもぐらが六十七匹／それに虫が五万二千とんで一匹／犬が四匹ねこが三匹／ねずみが一軒に二匹として四十匹／村の人は九十六人／あわせて村の人口は／ただ今　五万二千七百九十四〉

こういう詩ですが、これから展開法で一行ずつ読んで行ってみようと思います。

授業するときに、これからどういう授業をするかということを考えて、あらかじめ、私は〈だんどり〉という言い方をするんですが、〈だんどり〉をするということが、一つあります。（板書）

私がこれからどういう〈だんどり〉をするか。なぜ、そういう〈だんどり〉をするか。ということを後で、みなさんに考えてほしいと思います。

数詞

たとえば鉛筆を数える時は、どう数えますか。

P　一本、二本、三本。

T　「一本、二本、三本」ですね。

では、ノートは？

P　一冊、二冊、三冊。

T　「一冊、二冊、三冊」ですね。ちゃんと答えてくださいね。（笑）

家は？

P　一軒、二軒、三件。

T　りんごは？

P　一個、二個、三個。

T　みかんは？

P　一個、二個、三個。

T　そうですね。では、この黒板みたいなのは？

P　・・・・。

T　「一面、二面、三面」です。

P　へえ―。

T　それから、イスだと？

P　一脚、二脚、三脚。

T　靴は？

P　一足、二足、三足。

T　なんで「一足」と言うの？あれは二個でしょう。なぜ「一足」なの？

P　……。

T　だって、あれは、一個だけはく人はいないでしょう。靴というのは、二つそろえて、おそろいになっているものだからね。だから「一足」と数えるわけです。
そういう「足」とか「人」とか「個」とか、数字に付くのは何といいますか。
P　……。
T　何も知らないのね、あんたら。阿部先生、しっかり教えて下さいよ。（笑）小学校で教えるんだよ。ま、教えない先生もいるかもしれんが。
P　単位。
T　「単位」ねえ。「数詞」といいます。
P　ああ。
T　ふつうに言ったり聞いたりしているでしょう。こういう基本的な用語、たとえば、さっきの〈つづけがき〉もそうですが、それを、大学生になっても知らないというのはおかしいですよ。
〈わかちがき〉とか〈促音〉とか〈拗音〉とかはイロハのことですから。
みなさん方が、先生になった時にも、用語をきちっと使っていくと子供たちの中に定着していくのです。

カテゴリー

ところで、「りんご二個たすみかん三個は」？
P　五個。
T　うん。何が五個？「みかんが五個」？「りんごが五個」？
P　くだもの。
T　これは、足し算できる？できると思う人。
P　……。
T　できないと思う人。
P　・・・・。
T　できないんだよ。（笑）できない。
じゃあ、この学級が、男四人、女十二人としよう。足し算できる？できない？
「男四人、女十二人、合わせて」？
できないんだよ。
でも、「この学級の人数を合わせて何人？」と聞きますね。そうすると「十六人」と答えますね。これは、これでまちがいないでしょう。
どういうふうに考えたらいいのでしょう。
いいですか。「りんご二個」と「みかん三個」は足し算できないのですよ。
だけど、どういうふうに足し算するかというと、「りんごというくだもの二個」と「み

かんというくだもの三個」を足して「くだもの五個」となるのです。

「男三人」と「女七人」は、直接には足し算できないのです。「男という人間三人」と「女という人間七人」を足して、つまり「人間が、人数が十人」ということになるのです。それを「カテゴリーちがい」といいます。「カテゴリー」というのは知っていますね。ま、種類とでもいうかな。

足し算でも、引き算でもそうですけど、カテゴリーをそろえなくてはいけません。だから、「魚三匹」と「虫三匹」は足し算できないです。そのままではできない。足し算でも引き算でも、カテゴリーをそろえないといけない。カテゴリーを、「種」とか「類」とかをそろえて、同一カテゴリーのもとで、足し算も引き算もするわけです。

というようなことは、本当は小学校できちんと教えなければいけない。

そのままでは、足し算できませんよ、と。

なぜ、こんなことを初めにやったかということは、後でわかります。

もちろん「数詞」という、算数のこともここで復習すること、あるいは新しく学習することもふくまれているのです。

国語の授業というのは、理科とか算数とか、社会とかいうものを、極端にいえば総合した教科なのです。

そういうものができている場合と、できていない場合とではずいぶんちがってきます。理科の知識があるなしでも、ちがってくる。

いいかげんな数

では、一行ずつ行きます。

〈村の林にゃ小鳥が八十羽〉。〈〈羽〉の下に赤で横線をひく〉

きっちり〈八十羽〉と言っている。これはどうですか。「ああ、そうか」と思う人？「えっ？」と思う人？

あなたは「純粋な子供」という感じです。（笑）正直だね。

あなたはどう思う？〈村の林にゃ小鳥が八十羽〉と言った時に。こんなにキリ良く数えられる？

P　キリがいいから。（笑）

T　キリがいいからって、そんな無責任な。（笑）

〈八十羽〉というのは、きっちりした数ですよね。でも、きっちりした数に小鳥を数えられるというのはどう？まず、ちょっと、ね。動物園の中の鳥小屋にいる鳥でさえ、数えるとなったら、おおごとですよ。まず、不可能に近いです。百羽ぐらい同じような鳥が飛び回っているからね。しかも〈林〉の中であちこち飛ぶわけでしょう。さっき数えたのがまた飛んで来ているかもしれんしね。せめて「八十羽ぐらい」と言ってほしいよね。（笑）

「八十羽かな？」とかね。（笑）そうでしょう。

〈いやいや　お昼ごろ／ひなが三羽かえったそうだから〉と言っているのは何ですか。「かえったから」ではないですね。〈かえったそうだから〉というのは、どういうこと？どういう言い方？

P　伝聞。

T　うん。伝聞（模造紙の詩に書き入れる）の形式というのは、五年生の言い方で言うと、どういうことになるでしょう。

P　誰かから聞いた。

T　うん。自分で数えたんじゃないよな。誰かから「三羽かえった」と聞いた。だから〈八十三羽〉だと。

〈三羽〉は確かかもしらんが、それも人から聞いた話ですからね。それをたして〈八十三羽〉と言っているが、この数を信用できる？あんまり信用できませんね。

〈村の小川と池にゃ魚がちょうど五百匹〉。どうですか、これ。（笑）みんな笑ったところを見ると、まあまあ常識があるわけね。

だいたい、水の中を泳いでいる魚を数えられますか。首をふらないで、口で言いなさい。（笑）

P　数えられません。

T　そう、そう。しかも〈五百匹〉なんて。

「この語り手は、どんな語り手かな」と思いながら読んでいって下さいね。

〈村の野原と畑にゃもぐらが六十七匹〉。（笑）今、笑った人は正常。これで笑わない人はへんですよ。感覚がどこかおかしい。

数えられますかね、〈もぐら〉を。〈もぐら〉はどこにいますか。

P　土の中。

T　土の中にもぐっているから〈もぐら〉というのかな。（笑）それを〈六十七〉なんて。「六十ぐらいかな」とか「六十匹はいるだろう」とかならわかるけど。端数までつけて、いかにも本当らしく言っているけど、みなさんはこの数を本当らしいと思いますか。

P　思わない。

T　いいかげんと思う人。（多数挙手）はい。いいかげんですよね。ふざけている。

かけことば

〈それに虫が五万とんで一匹〉。これはどうですか。〈とんで〉というのは何ですか。虫が飛んでいる？（笑）

P　桁。

T　そうですね。桁がとんでいるということです。百と十の位をとばしている。そろば

んでやりますね。桁がとんでいるのです。

ところで、ちょっと、これ、〈五万二千〉それに〈とんで一匹〉なんて、どうですか。〈とんで〉というと、虫が飛んでいるようにも読めますね。こういう表現の仕方を何というのか知っていますか。「桁が飛ぶ」と「虫が飛ぶ」の両方に。

P　かけことば。

T　うん。さすが大学生（笑）「かけことば」（詩に書き入れる）です。かけことばを使っています。

話をもどしますよ。しかも、〈二千とんで一匹〉と言い切っているのは、どう考えてもおかしいですね。

〈犬が四匹ねこが三匹〉これはどう？

P　まあまあ。

T　うん。このへんは確かかなあ、という感じですね。

〈ねずみが一軒に二匹として四十匹〉（笑）

〈として〉（詩に傍線をひく）というのは、これは実際にねずみを数えたの？

P　数えていない。

T　どうしたの？これ。

P　仮定。

T　仮定ですね。仮に家に二匹ずついるとすれば、〈四十匹〉というのですから、家は何軒ですか。今は算数の問題ですよ。

P　二十軒。

T　正解。（笑）「二十軒」（板書）ですね。だけど、どうですかね。ねずみというのは、こんなものですかね。猫のいる家にはいないとしても、猫のいない所だと、ねずみというのは、いるとすれば、もう、五、六匹かあるいは十匹ぐらいです。〈二匹〉とかは、親子でいるとか夫婦でいるとかは考えられない。だいたい親子、夫婦ゴチャゴチャといるんですよ、「ネズミ算」ということばがあるくらいですから。

ま、〈ねこが三匹〉だから、猫のいない家がけっこうたくさんあるわけですけども。

とすると〈四十匹〉という数はどう？

P　少ない。

T　少なすぎるんだよ（笑）〈四十匹〉なんて、〈一軒に二匹として〉なんて、どこから割り出した数だと思いますか。いいかげんだと思わないですか。

私だったら、まあ、〈ねこが三匹〉ということは、十七軒は猫がいないということで、十七軒に、平均して五、六匹はいるだろうと考えます。田舎の村ですからね。とても〈四十匹〉なんてもんじゃない。「百匹」とかでしょう。

〈村の人は九十六人〉。これはどう?ウソくさい?本当らしいですか。

P　本当らしい。

T　これだけは本当でしょうね。これは本当だと思います。

そうすると、ここで確からしいのは〈犬が四匹ねこが三匹〉と〈村の人は九十六人〉の二つぐらいでしょうね。あとは、みなさんも言っていたように、実に「いいかげん」(板書)ですね。ふざけた感じがします。

話体

たとえばこのような、語り手の語り方のことを「話体」(板書)といいます。「話し方」ということです。語り手の話体が、どう考えても、何かいいかげんで「ふざけた」(板書)感じがします。

さて、次へいきますよ。〈あわせて村の人口は〉。〈人口〉というのは何ですか。

P　人の数。

T　なぜ〈人口〉なんですか。なぜ〈口〉ですか。「人数」と書けばいいじゃないですか。

口は一人にいくつある?

P　一つ。

T　うん。口の数が人間の数なんです。動物なんかは、頭の数で「〇頭」と言ったりします。足や手は数に使わないですよ。ややこしいですからね。口や頭は一つですからね。鼻を使っても良さそうですけどね。(笑)ま、誰かの好みでしょうね。

〈人口〉は人間の数です。じゃあ、〈村の人口〉は何人ですか。

P　〈九十六人〉。

T　そうですね。ところが〈あわせて〉とある。何を合わせたの?

P　〈小鳥〉の数、〈魚〉の数、〈もぐら〉の数、〈虫〉の数、〈犬〉の数、〈ねこ〉の数、〈ねずみ〉の数、〈人〉の数。

T　これらを合わせている。こんな計算の仕方はどう?

P　おかしい。

T　「おかしい」(板書)ですね。ふざけています。

ところで、この詩は「ばかばかしい」(板書)詩ですか。ばかばかしいということになる?

「ナンセンス」(板書)とも言いますね。ナンセンスとは「無意味」(板書)ということです。

この詩はばかばかしい、ナンセンス、無意味だと思う人いますか。

P　思わない。

T　思わないの？

P　ちょっとアホくさい。

T　その「ちょっと」の残りは何？（笑）残りにもっと何かありそうだよね。

さて、（あわせて）（詩に傍線をひく）と言うときに、種類のちがうものは加えられないと言いましたね。つまり、りんごとみかんは足し算できない。りんごというくだものとみかんというくだものは合わせられる。くだものの数です。

「犬四匹と猫三匹で七匹」という言い方はしませんね。「家畜」あるいは「ペット」なりが「七匹」という言い方はします。種類、つまりカテゴリーを決めなければいけない。カテゴリーを決めれば足し算ができます。

わかりますか。これらを直接加えることはできないんですよ。ぜんぶ種類がちがいますから。

じゃあ、どういうふうに考えて合わせたのでしょうか。これらに共通するものは何でしょう。

たとえば、りんごとみかんは「くだもの」という点で一緒です。

男の学生と女の学生は、男と女でちがうけれども、「学生」という点で一緒です。学生として見れば加えられるわけです。

じゃあ、これはどういうふうに考えて合わせたのかを考えて、ちょっと話し合って下さい。

P　（話し合い）

T　どう考えたら（あわせて）と言えるのか。

ここ（詩の末尾を指示棒で指して）に数詞をつけてみて下さい。（詩に（　）を書き入れる）

ぜんぶ合わせるためには、それぞれをどういうふうな共通項でくくったらいいかということです。

どうですか。意見を言ってみて。その、一番かしましいグループ。（笑）

P　・・・今、もめてます。

T　そんなことでもめないで。これ、共通なものは何？

小鳥、魚、もぐら、虫、犬、ねこ、ねずみ、人間を、ぜんぶ一緒にくくれるものは？

りんごとみかんを共通にくくれる、上の概念は「くだもの」でした。

P　生き物。

T　うん。生きものですね。「村にいる生きものを合わせて」と言えば、ぜんぶ生き物として数えられるわけね。

ふつうは、こんな数え方はしませんよ、常識的にはね。

でも、この語り手は、ある意味では非常識だよね。ある意味ではふざけている、ある意味ではいいかげん、と言ってもいいが、要するにこの「考え方」（板書）として、これらのすべてを「生きもの」（板書）と考えた。

「生きもの」というものは何ですか。

P　生きている。

T　生きているものですよ。いのちがある。この中にいのちのないものがありますか。

P　ない。

T　ないですね。ぜんぶいのちがあるものですよ。だから、いのちの数を数えたのです。そうでしょう。「いのち」（板書）の数です。それを〈あわせて〉いるのです。

そうすると、いのちというのは、大きい小さいがありますか。大きい動物小さい動物はありますが、大きいいのち、小さいいのちというのがある？

たとえば、この人のいのちとあなたのいのちはどちらが大きい？

P　私。（笑）

T　ずぶとい。（笑）いのちに大小はない。もちろん形があるわけでもない。

それぞれの生きものにとって、それぞれのいのちはどういうものですか。

P　一つだけ。

T　自分のいのちは、たった一つの、かけがえのないものですね。そういう意味ではみんな一緒です。

だから、いのちというのは「すべて同じ」（板書）なのです。「同等」（板書）と言ってもいいかな。

「かけがえのない」（板書）ものです。

そういう意味で、この語り手は〈あわせて〉〈ただ今　五万二千七百九十四〉と言っている。

これ、計算しなくてもちゃんと合っているからね。（笑）私が計算してみた。ピシャッと合っていた。

でも、これらの数自体はいいかげんです。このへんの数自体は何かウソくさい。ふざけている。

でも、〈あわせて村の人口は〉の〈人口〉に何を入れればいいですか。村の「生きものの数」と入れればいいでしょうね。

それは〈ただ今　五万二千七百九十四〉「いのち」（詩の末尾の（　）に書き入れる）

どうですか、こういう考え方は。人間だけを尊いいのちと考えて、犬とか猫とか魚とか虫とかいうようなものは、あんなものはちっぽけないのち、とるに足りないいのち、どうでもいいようないのちと考える考え方もある。

でも、あれもみんなかけがえのないいのちなのだ、いのちはみんな平等なんだという考え方。これこそが今の環境問題を考える、エコロジーの思想です。すべての生きものは平等である。人間だけが特別な存在なのではない。

表現形式と内容

そういうふうに考えると、この詩は、ふざけた詩ではないですね。詩の内容です。詩の主題です。

そうすると、この詩は、「表現形式」（板書）といいますが、表現形式はふざけた、だけど「表現の内容」（板書）、表現の内容というのは、「テーマ」（板書）であり、思想（板書）、考え方ですが、それはすごいものなのです。

さっき「ナンセンス」とか「ばかばかしい」とか言いましたが、あるいは「無意味」とか思われるけれども、実は「深い意味」（板書）をもった詩だということになります。

ただし、これは、私たち読者がそういうふうに読んではじめてそうなるわけです。

「なんだ、ばかばかしい詩だ」と言って、そこでポイと捨ててしまった人にとっては、ただの「ばかばかしい詩」でしかないのです。

でも、今勉強して来たようにして読むと、ばかばかしい言い方をしているけれども、そこには深い思想が、考え方があるのだと。一見無意味に、一見ナンセンスに見えるが、深い意味が、エッセンスがあると。

詩の美

これが、この詩のおもしろさです。まじめな深い思想を、一見ふざけた、ばかげた形で表現している。そこにこの詩のおもしろさがあるのです。これを「美」といいます。

この詩の美とは何かというと、それが、この詩の美の在り方。まじめなことをまじめに言っているのではなくて、まじめなことをふざけた、おもしろい、一見ナンセンスに見える形で表現している。そこにこの詩のおもしろさがある。詩の美がある。

美というのは「美しい」という意味ではなくて「おもしろさ」とか「味わい」とかいうことです。

それでは、展開法というのはわかりましたか。こういうふうにして、一行一行たしかめながら行って、くり返しくり返し「おかしい、ばかげている、無意味」というふうになってきた。さて、でも、何なんだ？ともう一度深く考え直してみると、実は、生きもののいのちはすべて平等、かけがえがないという思想を表現している詩だ、ということになる。深いところまで読みを進めることができる。

こういうふうにもって行く授業の方法が展開法です。

【「村の人口」の板書】

詩

だんどり　数詞

いいかげん
ふざけた　話体
おかしい
ばかばかしい　ナンセンス　無意味　表現形式

考え方
生きもの―いのち
すべて同じ―平等
かけがえのない　ふかい意味
表現内容
テーマ・思想

「バッタのうた」（折衷法）

次は「バッタのうた」です。（模造紙に書いた詩を黒板にはる）

バッタのうた　　おうち・やすゆき

バッタ
草の色から
ピョンと　とびだす　バッタ

じっとしてれば
はっぱと　おんなじ　バッタ

ピョンと　とばなきゃ
みつからないのに　バッタ

バッタ
草の色から
ピョンと　とびだす　バッタ

じっとしてたら
はっぱに　なっちゃう　バッタ

バッタだからね
ピョンと　とびたい　バッタ

一連。〈バッタ／草の色から〉、「草の中から」じゃないですよ、〈草の色から〉です。ここに注意して下さい。

〈ピョンと　とびだす　バッタ〉。

二連。〈じっとしてれば／はっぱと　おんなじ　バッタ〉。

三連。〈ピョンと　とばなきゃ／みつからないのに　バッタ〉。

四連。〈バッタ／草の色から／ピョンと　とびだす　バッタ〉。

一連と四連がまったく同じです。一字一句ちがわない。

五連。〈じっとしてたら／はっぱに　なっちゃう　バッタ〉。

二連と五連はちょっと似てますね。

そして六連。〈バッタだからね／ピョンと　とびたい　バッタ〉。

さて「折衷法」というのは、どういうことかと言いますと、ある所から切り込む、しかしやっぱり流れ、「筋」というものをきちんとおさえながら考えて行くということです。

展開法というのは、筋にそって、筋をおさえて読んで行く方法ですね。

層序法というのは、筋をはなれて、ある観点から、あるところへ切り込んで行くという方法ですね。さっきの「かもつれっしゃ」は表記のところから切り込みました。

一連と四連のちがい

今度は、たとえば一連と四連にだけ目をつけてみます。ちょっと見て下さい。（詩の一連と四連の頭に横線をひく）

一字一句ちがわないでしょう。

問題です。「一と四はどうちがうか」（板書）

ズバリそこから切り込む。というのは、わかりやすい問題でしょう。だって、一連と四連を比べてみるとまったく同じでしょう。同じだったら、内容も同じなのかなあ。でも、ちがうかもしれんなあ。ちょっと考えてみたいいですね。考えてみたくない？

P　考えてみたい。

T　無邪気ねえ。ウソ。（笑）しかたなく言っているんじゃないの？

これを、グループで考えてみてください。

ヒント。〈草の色から〉と言っているところです。語り手を〈ぼく〉という男の子としておきましょう。どうして、語り手の〈ぼく〉は、「草の中から」と言えばいいのに、〈草の色から〉（詩の〈色〉に傍線をひく）〈ピョンと　とびだす〉という言い方をしているのでしょう。

そして〈じっとしてれば／はっぱと　おんなじ〉というのは、「はっぱの色と同じ」ということでしょうね。

〈ピョンと　とばなきゃ／みつからないのに　バッタ〉。〈バッタ／草の色から／ピョンと　とびだす　バッタ〉。まったく同じですよ。ことばは同じですね。

でもね、意味するところはまるっきりちがうんですよ。

ま、ゆっくり考えてみて下さい。話し合ってね。

それを考えるためには筋を考えて、ここからこういうふうに（詩の一連と二連の間、二連と三連の間、三連と四連の間に黄色チョークで←を入れる）読まないと、両者のちがいは見えてこないですね。

そういう意味で言うと展開法でしょう。

層序法というかたちで、ある所から切り込むわけだけれども、それを考えるためには、

順序を追って考えないと考えられない。

ま、話し合ってみて下さい。どういうふうにちがうか。まるっきりちがうんだよ。

P　（話し合い）

T　〈みつからない〉って、誰にみつからないのでしょう。

P　（話し合い）

語り手の気持ちのちがい

T　ここの二人がいいことを言っているみたいだから聞いて下さい。ご静聴。

P　まず、最初の三連を①とし、残りの、後の三連を②と分けました。最初の三連の①は、語り手である〈ぼく〉の、バッタが「なぜ草の中から飛び出すのか」という疑問を表していると思います。で、残りの三連は、〈ぼく〉が「なぜ飛び出すのか」ということを本人なりに納得する理由をつけているところを書いたものだと思うんですけど、一連と四連がどうちがうのかというのは、〈ぼく〉が、草の中から飛んで来るバッタに対する考え方のちがいを表すために、四連に同じのを・・・・

T　うん。そのちがいは、どういうちがい？一連と四連は、たしかにちがうんだね。具体的には〈ぼく〉の気持ちがどういうふうにちがって来たの？

P　・・・・

T　じゃあ、そこまでということで。（笑）次のグループの二人。みんなに当てるからね。どちらが答えてもいいですよ。

P　同じようなことですけど。

T　いや、同じことでもいいんですよ。

P　〈草の色から／ピョンと　とびだす〉というところが、最初の一連では、前のグループが言っていたみたいに、「草の中から、なんで飛び出すの？」という感じで―

T　飛び出したら、どうなるの？

P　人間とか他の天敵に見つかって、つかまってしまうので「なんで、あえてそういう危険なことをするのか」ということで見ているんですけど、四連では、何て言ったらいいのか、外から見ていた語り手が、ある用語で言うと「バッタの方によりそって」（笑）

T　私の！（笑）バッタの方によりそってね、バッタの気持ちによりそって。（笑）

P　バッタの気持ちによりそって、バッタだから、敵に見つかるかもしれないけど、はねるのが職業なので（笑）

T　おお。ま、しょうがないや。いいですよ。

その後ろのグループの人、どうぞ。

P　前の方の一連の方は、見ている人の方。

T　語り手。

P　あ、はい。語り手が子供だとして考えていくと、前半部分の方は「どうして飛ぶんだろう」という語り手の疑問を表していて―

T　それはバッタを思いやる気持ちですよね。見つかったら殺されてしまうのになあ、と。

P　はい。で、後半の方は、子供である語り手の視点で、飛び出す理由を、こういう理由で飛ぶんだなあと。五連目で、こういう理由だというのを語り手は考えて、六連で、何か―

T　はい、いいですよ。最後に一番うしろの四人。さっきは、せっかく当てたんだけど、言いそびれちゃったから。

P　一連目の方は、この詩の前の場面があると仮定すると―

T　ほほう。

P　たぶん、語り手としての〈ぼく〉はバッタの存在に気づいていなかったなんじゃないだろうかと思います。

T　ああ、なるほどね。何気なく通りかかった。うん、それで。

P　視界のすみで何か動くものがあったから、見てみたら、それはバッタで―

T　ああ。なぜ、最初、気がつかなかったんでしょうかね。

P　たぶん、バッタの色は緑色で、草の色と同じ色なので―

T　そうですね。保護色です。

P　動いていなかったら気づかないでそのまま通り過ぎて行ったのでしょうけども、一連目で、動くバッタに気づいた語り手は―

T　ここはね、結局、ある意味では「おどろき」ですよね。「なんだ、バッタがいたんだ！」と。保護色で草にまぎれて見えなかった。それが、ピョンと飛び出した、そのために気づいたわけですよね。「なんだ、こんな所にバッタがいたんだ！」という感じです。言ってみれば、おどろきを表している。

P　で、三連目は、その飛び出したバッタに視点が移っているわけで、そのようすをたぶん観察していると思うので、次に、バッタはそのままじっとしているのか、それとも次に飛んで行くのかと観察していると、バッタがまたピョンと飛んで―

T　ここは、また再び飛んだということ？

P　はい。

T　再び飛んだのかな？いっぺんピョンと飛び出したことを、ちがった意味づけをしているのではないかな、ここは？

いいですよ、続けて。

P　まず一連目でおどろいたというのは、三連目と二連目で、〈とばなきゃ／みつから

ないのに〉と〈じっとしてれは／はっぱと　おんなじ〉で―

T　うん。それなのに、見つからないのに、バッタのやつ、安全な草の所からピョンと飛び出したりする。危ないじゃないか。ということですね。

イメージと意味の筋

はい、いいですよ。時間がないから、後はちょっと私が。

（一連を指して）なんだ、ここにバッタがいたんだ、と。

（二連を指して）じっとしてれば、はっぱと同じでわからない、気がつかない。

（三連を指して）だけど、ピョンと飛ばなきゃ見つからないのに。ということを裏返して言うと、ピョンと飛び出すから見つかるじゃないか、ということです。これは裏返しの言い方ですよ。ピョンと飛ばなきゃ見つからずにすむのに、安全なのに、

（五連を指して）だけど、じっとしてたらはっぱになっちゃって、つまんない。ただじっとして、安全のことだけ考えて、好きな所へも行かないで、ただじっとしていたら安全かもしれないけど、たいくつな人生、つまらない人生、バッタに人生と言うのはどうかと思うが（笑）人間で言えばそういうこと。

（六連を指して）やっぱり、バッタというのは飛びたいわけだし、飛びたいのがバッタだし、飛びたいのだからしょうがないじゃないか。

というふうに言っているわけです。

つまり筋にそっていく。この「筋」は事件の筋しゃないですよ。できごとは、（一連を指して）ここでピョンと飛び出したということが一つあるだけです。あとは、それについて語り手が思いをめぐらしている。語り手が自分の中で、ああでもない、こうでもないと考えたことを、気持ちを筋にして言っているわけです。

それが筋です。そういう、イメージと意味のプロセスです。

とにかく三つの詩を駆け足でやりましたが、展開法と層序法、二つをチャンポンにした折衷法の三つを、おおまかなところはわかっていたたけたのではないかと思います。

切り口・軸・目のつけどころ

あとは、詩によって、いろいろな工夫の仕方がありますね、どこから切り込んでいくかという。

層序法でも、どの言葉を手がかりにして、どこから切り込んでいくかという「切り口」ですね。そこにを見つける。

展開法のばあいには、何を軸にして展開していくか。さっきの「村の人口」で言えば、数の数え方がどうなんだ？と。確かな数え方なのか、いいかげんな数え方なのかということに目をつけて行って、もう、ひじょうにいいかげんな数え方じゃないか、と。

しかも合わせられないものまで合わせて五万なんぼ、だなんて言うのは、何ということ

だ、というふうに読んで行ったわけですね。

やはり、読むときには一本通して読んでほしい。「目のつけどころ」ですね。

そして、「いや、まてよ」と。ふつうは、常識的には、あんなものを合わせる、加えるなんて、一緒にはできない。でも、ちがった考え方に立てば、いのちなんてものはみんな一緒じゃないか、平等じゃないか。

そうすると、一見ふざけたように見える詩だけれども、ここにある考え方というのは、深い環境意識というものに基づいた、深い生命観というものに基づいた発想がある。というふうなことが引き出されてくる。

と、こういうことですね。

そういうふうに、層序法、展開法というのは、どちらでやってもできるんですけれども、どちらでやった方がおもしろくいくかということを考えて選ぶということです。

それから場合によっては折衷してやるということです。

時間が過ぎたので終わりにします。

阿部昇教授　どうもありがとうございました。こういう形で三つのパターンを紹介していただきました。

いろんな指導法は、そういう目で見ると、やはり二つの組み合わせになっていると思うので、「これは、西郷先生が話された層序法かな？」とか「これは展開法かな？」というふうに意識しながらやると、自分の授業が見えてくるのではないかと思います。

長い時間にわたって模擬授業をやって下さった西郷先生に大きな拍手を。

（拍手）

【「バッタのうた」の板書】

バッタのうた　　おうち・やすゆき

バッタ
草の色から
ピョンと　とびだす　バッタ

じっとしてれば
はっぱと　おんなじ　バッタ

ピョンと　とばなきゃ
みつからないのに　バッタ

バッタ
草の色から
ピョンと　とびだす　バッタ

じっとしてたら
はっぱに　なっちゃう　バッタ

バッタだからね
ピョンと　とびたい　バッタ

一と四―どうちがうか？